



人口減が進む中、安心して子どもを産み育てられる環境をつくることは地域の活力につながります。鹿児島県内の産科不足・医師偏在解消や地域医療の充実のため、2014年12月に鹿児島県医師会が創設した医師・助産師・看護師不足対策基金「はやぶさ」プランの支援を受けた研修医・学生49人のうち、今回4人にお話を伺いました。

助産学生 女性的一生に寄り添う

猪目 安里さん (24)  
(いのめ・あんり) =指宿市出身

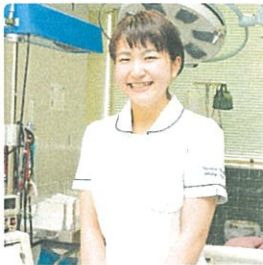
高校3年生の時、姉の出産に立ち会って、助産師さんが活躍する姿に自分の進むべき道が見つかったと感じました。大学院助産学コースへの進学にあたっては費用面が心配でしたが、「はやぶさ」プランに申し込み、助成を受けて鹿児島県内外での実習・学会の旅費などに役立てることができ、本当に感謝しています。

ニュージーランドでの研修にも参加し、先進的な取り組みなどを学ぶことができました。大学院では、分娩施設がない離島に住む母親たちの自己ケアについて調査・研究した結果を論文にまとめました。

地域医療、特に産科は人手不足もあり、命に関わる厳しい場面もありますが、

鹿児島大学大学院 保健学研究科

家族が誕生する瞬間に関われるやりがいがあります。思春期から老年期までの女性的一生に寄り添い、何でも相談してもらえる助産師を目指しています。



初期臨床研修医 命を支える現場に魅力

風呂井 敦さん (30)  
(ふうらい・あつし) =鹿児島市出身

昨年3月に岩手医科大学を卒業後、初期臨床研修の1年目で、「はやぶさ」プランの助成を受けています。霧島市立医師会医療センター、鹿児島大学病院で、消化器内科、循環器内科、外科、脳神経外科、麻酔科などを経て、始良市のフィオーレ第一病院で産科・婦人科の研修を行っています。

助成金は、各科ごとの専門書の購入や、一次救命処置(BLS)、二次救命処置(ACLS)などの講習費に充てることができ、大変助かっています。外科を志望していますが、産科で妊婦検診や出産・手術に立ち会いました。母子の安全を守り、新しい命の誕生を支える現場にも魅力を感じています。

医師不足の地域では、専門医であって

霧島市立医師会医療センター

も、患者やその家族と親身に対話できる医師であることが大切だと思います。患者に寄り添う医師として、地域医療に貢献したいと思っています。



# 「はやぶさ」プラン 安心して産み、育むために

看護学生 経験積み安心与えたい

立和名 勇希さん (29)  
(たちわな・ゆうき) =いちき串木野市出身

高校2年で祖母を亡くした際、男性看護師にお世話になったのが、医療の道を選んだきっかけです。自分も入院を経験し、「感謝される仕事だ」と感じました。

いちき串木野市 医師会立脳神経外科センター

「はやぶさ」プランは、看護学校の先生から勧められました。実習で収入が無いときには非常に助かりました。

この病院は4年目です。1年目のことですが、担当した患者さんが亡くなり、ご遺族から「あなたが夜勤の日で良かった」と声を掛けられました。泣いてはいけなそうに思いつつ、涙が出そうになったのが印象に残っています。

急性期病院で、一刻を争う患者さんも多く搬送されます。緊張感がありますが、スキルアップにつながる場所だと思います。経験豊富な看護師は、患者さんの表情や声のトーンで、気持ちや変化を察知します。専門分野の認定看護師を目指すのと同時に、そういった安心感を与えられる看護師になりたいと思います。



産科後期研修医 謙虚な心で学び続ける

鮫島 浩継さん (28)  
(さめしま・ひろつぐ) =鹿児島市出身

高校時代にあった産科関連の訴訟や、産科医不足の社会問題化がきっかけで、産科医を意識しました。医師を志し、医学部を卒業してもその思いは変わらず、

県立大島病院

産科医になりました。

産科は初めてで、昨年10月から。主治医として外来患者の診察をしながら、月に数回ある緊急手術にも携わります。

へき地医療には学生時代から興味があり、種子島へ見学に行ったこともあり、医局の推薦で「はやぶさ」プランを受け、「求められる役割をしっかりと果たさねば」という責任を感じました。

ただ、産科医3人態勢で相談ができるし、離島だからと特別に意識することはありません。

幸せな瞬間に数多く立ち会えるのが産科の魅力。一人一人の患者さんと接する機会を大切にしながら謙虚な気持ちで学び、幅広い知識を持って診察や執刀ができる医師になりたいと思います。



「はやぶさ」プラン 募金のお願

鹿児島県医師会では医師・助産師・看護師不足対策基金「はやぶさ」プランの募金をお願いしています。基金は、県内の地域医療を担う医師および看護師(助産師を含む)の確保、定着、偏在解消を促進するための活動・事業に充てられます。

- 募金 1口5,000円以上(個人・法人、何口でも可)
- 募金振込先 公益社団法人鹿児島県医師会
  - 鹿児島銀行 中央支店 普通預金 No.3036485
  - 鹿児島県医師会信用組合 本店 普通預金 No.1004030
- 問い合わせ先 鹿児島県医師会 庶務課
  - 鹿児島市中央町8-1 TEL.099-254-8121 FAX.099-254-8129 E-mail: isisyomu@kagoshima.med.or.jp



鹿児島県内の産科医療は、産婦人科医師や分娩助産師の減少、医師の高齢化により、分娩救急・医療機関の廃業が相次ぎ、他の地域でお産を依頼される妊婦さんも増えています。地域の中核病院でも、産婦人科の医師不足は深刻で、このままでは産科医療の崩壊を招くことにもなりかねない状況にあると考えます。

地域の産科医不足に加え、助産師や看護師も多くの県外へ出て行き、鹿児島市以外の地域で助産師や看護師が不足しています。そこで、鹿児島県医師会では、医療に使命感と情熱を持った人材の地元へ定着を図り、地域偏在の解消や人口減少に歯止めをかけるため、2014年12月に「はやぶさ」プランを創設しました。

鹿児島大学産科(婦人科)および鹿児島市立病院産婦人科に在籍する後期研修医・医師会病院で研修する鹿児島大学病院および医師会病院所属の初期臨床研修医・卒業後、直ちに県内の産科医療機関に勤務予定の助産学生、地域の医師会立病院に勤務予定の看護学生を対象に、医師に5万円、助産学生・看護学生に3万円を助成しています。

16年度から助成を開始し、2年間で医師10人に48.5万円、助産学生20人に68.4万円、看護学生19人に68.4万円、49人に合計185.3万円を助成しました。来年度は対象枠を拡大し、さらに支援を広げます。

産科守り人口減に歯止めを

助成を受けて卒業した助産師・看護師は全員、県内の医療機関で働いています。育児をしたという学生もおり、資金面で助けられたという声も聞きました。

県内の研修医数は、基幹型臨床研修病院の先手の取り組みや地域枠制度の影響もあり、年々増加しています。今年4月から産科に進む予定の県内の研修医は10人で、例年よりも大幅に増えました。

「はやぶさ」プランでは、本年度から研修医・卒業医師の県内定着対策として、鹿児島大学病院に助成しています。鹿児島県立大島病院地域医療支援センターと併せ、地域枠の医学士卒業生、大隅南薩地域の2カ所で開催しており、後々の地域で開業する予定です。

「はやぶさ」プランの基金は、県内の企業団体個人の浄財により、18年3月9日現在、710万円ほど集まっています。人口減少社会にあっても、子どもは地域の子を安心して産み、育てる環境があつてこそ、活力も生まれます。皆さまにぜひご協力をお願いいたします。



公益社団法人 鹿児島県医師会 池田 琢哉 会長

医師会の組織には、日本医師会、都道府県医師会、都市医師会があり、鹿児島県医師会には、県内の医師3909人が所属しています(2018年3月1日現在)。医学・医療に関する専門職である医師の使命として、わが国の正しい医療のあり方を守り、また国民の健康保持増進を図る社会的責務を遂行するために設立された医師の団体です。